



船乗りたちの墨書板(運上屋旅館)



神威岬 『積丹町史』(1980)より



博士(歴史民俗資料学)

高野 宏康

小樽商科大学  
グローバル戦略推進センター研究支援部門  
地域経済研究部・学術研究員  
小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会長

## 北前船と後志 【二】

# ～積丹・神恵内の北前船の遺産～

### 一 積丹の北前船の遺産

#### (1) 神威岬

現在、絶景を満喫できる後志有数の観光地である神威岬は、古くから海上交通の難所であり、様々な伝説がのこっているが、北前船にとつて非常に重要な場所だったことはあまり知られていない。北前船が神威岬に近づくと、「オカムイマイリ」といって炊(カシキ)が裸になって禪を締め、腰に注連縄を巻いて、船のへりを三度回るといふ風習があった。山口県の角島近くでも同じようなことをやっていたという。この奇妙な風習は、難所を無事に通過したいという船員たちの願いから生まれたのだろう。

さらに重要なのは、神威岬一帯が女人通行禁制の地であったことである。伝説では、源義経を慕って身を投げたチャレンカの嫉妬心が女性を乗せた船を転覆させてしまったため、岬一帯が女人禁制の地になったとされる。追分節には、「蝦夷地海路のお神威様は□なせに女の足をとめる」といった、女人通行禁制を強く意

平成二十九年四月、全国十一自治体の北前船寄港地・船主集落が「日本遺産」に認定され、道内では松前町と函館市が認定地となったが、来年度、追加認定を実施するということで、道内では小樽市と石狩市が申請中である。後志沿岸部の寄港地の自治体は日本遺産に申請していないが、古くから各地の船が入りし、様々な北前船の遺産がいまも残っている。

今回取り上げる積丹と神恵内は、本州の北前船主家へのこる航海日誌などの資料にはよく登場するが、現地の観光パンフレット類には北前船との関わりについてはほぼ記載されておらず、自治体史をはじめ郷土史本でもわずかな情報が得られるのみで、ゆかりを見つけては容易ではない。ここでは現地調査でわかってきた北前船の遺産の一端を紹介してみたい。

※北前船には様々な地域呼称があり、後志では「弁財船」と呼ばれることが多いが、本稿では特に船型をさす場合以外は「北前船」と表記している。

識した歌詞が数多くみられる。歴史的には、元禄四(一六九二)年、松前藩が西蝦夷地の神威岬から北への婦女子の通行を禁じているが、和人が奥地へ定住すること、ニシン漁をはじめとした権益を損なうことを恐れた松前藩による規制と考えられている。安政二(一八五五)年、蝦夷地一帯が幕府直轄下におかれると女人禁制は解除され、奥地への定住が進み、北前船で運ばれる生活物資を必要とする人々が急増していった。

平成十六(二〇〇四)年、「積丹半島と神威岬」は北海道遺産に認定された。神威岬の入口には女人通行禁制をイメージした門が作られているが、神威岬と北前船の関わりについても紹介してほしいところである。

#### (2) 船乗りたちの墨書板

積丹の来岸町にある運上屋旅館には、北前船の船乗りたちが墨書した壁板が残されている。

この壁板は、同町内にある神威神社の拝殿の壁板の一部であり、この地に渡航してきた船乗りたちが同神社に参詣した際に書いたものと伝わる。神社の拝殿が解体された時、運上屋旅館の館主、佐藤哲夫氏がこれらを貰い受け、後世にのこすために、旅館の浴場の壁板として利用することにした。神威神社の拝殿内には佐藤氏が翻刻した墨書の内容が額装して掲げられている。

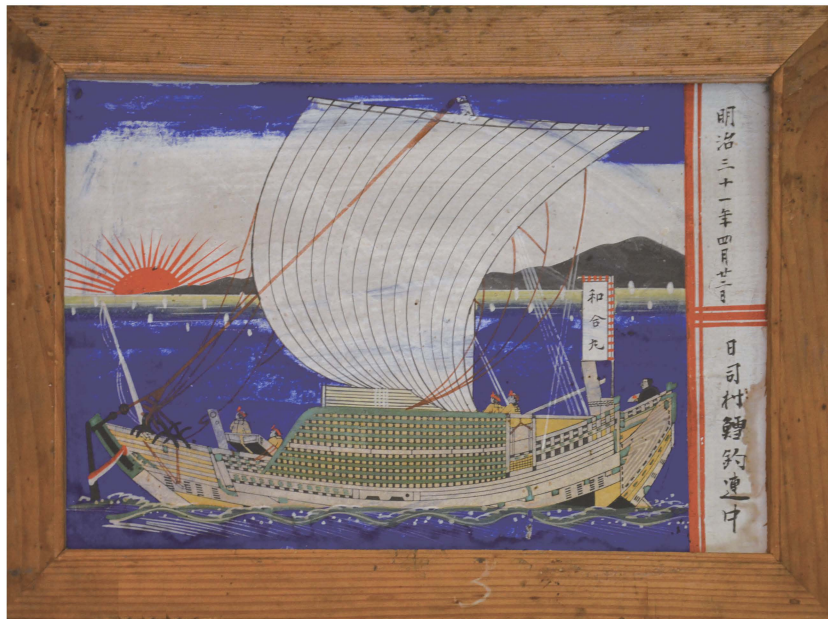
この墨書の記述を読むと、江戸時代の北前船の船員たちが、来岸で日和待ちしながら海上安全の願いを込めて書いたことがわかる。上ノ国や江差、青森の船乗りたちが寛延期から安政期まで百年以上にわたって書いたものである。以下、そのうち五点を紹介する。

寛延四年末 九月吉日 清吉、紋次郎、与之吉、文之助、石四良、豊松、松之助、文治、円平、□□、人数拾人

天保五年二月八日参申候 奥州松前上ノ国村 中嶋弥八 船中



タイトルバック 北前船艦首模型  
右：船磁石  
(いずれも小樽総合博物館蔵)



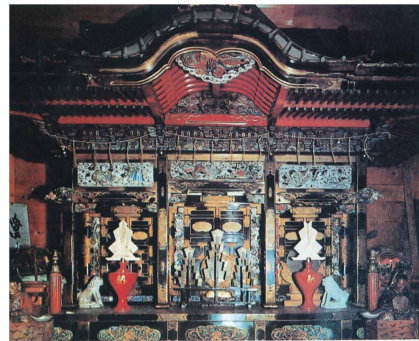
「和合丸」の船絵馬 明治31(1898)年4月22日奉納。  
奉納者は「日司村鯉釣連中」(寸法312×418mm)



弁財澗(神恵内村)



「神威鶴」の販促ポスター(積丹町蔵)



神威神社の神殿  
『積丹町史』(1980)より



積丹神社(積丹町大字日司町)

福井子之助は、鎌伝習館ヤマシメ番屋を建てた初代福井重治郎の義父にあたる。神威神社は、寛文三(一六六三)年に出稼ぎの漁民が社殿を再建したが、拝殿のみで神殿がなかったため、明治三年に漁業者たちの寄付によって建立されることになった。青森県大町の支配役の内手代であった岡本豊吉を通じて神殿

神威神社の神殿(写真左頁)は、青森米町の彫刻師・佐々木定五郎の作で、総檜材に極彩色の金箔薄塗り、金具は京都に特別注文したものであるなど、神殿建築として非常に価値が高いといわれる。この神殿は、明治三(一八七〇)年に米町の福井子之助が所有する弁財船で青森から運ばれたものである。

### (3) 神威神社の神殿

嘉永五年 壬子□月□日 当地安着仕候□□□□海上安全順風ニ被成下度候此所江さんけいたし候 奥州松前亀田郡福山城下奥の巴峯□  
安政四巳年三月七日 朝当所江入船仕候参詣 津軽青森番所 海上安全 稲荷丸  
安政四年丁巳三月十日 於賀武意明神様御神霊 ラエキツスデ日和待仕候其時



鎌伝習館ヤマシメ番屋  
(積丹町大字米町)

の注文契約を結ぶと、この神殿の運搬を来岸町の小川五郎兵衛と、米町の福井子之助が運送すると申し出たので、どちらを指名するかが困難になり神社でおみくじをして決めることになった。その結果、青森と海産物の取引をしていた福井子之助に決定したという。  
同年六月中旬、福井子之助が所有する十五反の弁財船で青森からの帰りに積み込み、三厩港で日和待ちし、潮流の烈しい三つの潮を乗り切って松前に渡り、茂津多岬、弁慶岬、神威岬を通り、来岸港へ向かって帆走したが、強風のため、米船船間に入港した。青森から来岸までの搬送は北前船航路のノウハウが活かされていることがわかる。

### (4) 北前船寄港地ゆかりの銘酒「神威鶴」

積丹の銘酒「神威鶴」は、北



銘酒「神威鶴」

### (5) 積丹の船絵馬

後志に多数の船絵馬があることは、北海道開拓記念館の学芸員、林昇太郎氏の一連の論文で紹介されているが、地元ではほぼ知らないことがわかる。

陸と積丹、小樽、三つの北前船寄港地にゆかりのある銘酒である。神威鶴は、明治十九(一八八六)年に積丹町余別で白方商店を開業した石川泉出身の白方與次郎が故郷の米と余別川の水を用いて同二十四年に誕生させた銘柄である。神威鶴は地元の積丹町余別では「ツル」と呼ばれて親しまれている。  
その後、白方商店は造り酒屋を営み、大正五(一九一六)年に醸造元を小樽の奥沢に移転した。昭和初期には白方酒造は札幌と旭川にも支店・分店を構え、神威鶴とともに成長していった。後に小樽の田中酒造が神威鶴の商標権を買い取り、醸造・販売している。

ほとんど知られていない。現地調査を実施したところ、現在では三つの神社に十五面の船絵馬が残っていることが確認できた。

積丹町日司町にある積丹神社には六面の船絵馬が奉納されている。「和合丸」を描いたものが二面あり、うち一面には奉納年と奉納者が記載され、「明治三十一年四月二十二日」「日司村鯉釣連中」とある。奉納者は「鯉釣連中」で、買い積み経営中心の狭義の北前船主ではないようだが、同形式の船絵馬である。その他の船絵馬は、弁財船一面、洋式帆船二面、蒸気船一面で、洋式帆船の奉納年は大正三(一九一四)年と記載されている。多様な船型の船が活躍しており、弁財船だけが北前船ではないことがわかる。

来岸町の神威神社の船絵馬は、洋式帆船三面、蒸気船一面である。洋式帆船のうち二面の奉納年は大正期で、奉納者は積丹以外に「函館市梶町三番地清水長次」という函館の船主の名前もみられる。入舸町の稲荷神社には五面の船絵馬が奉納されており、弁財船一面、洋式帆船一面、蒸気船三面である。青森県の船主が奉納したものが二面ある。

## 二 神恵内の北前船の遺産

### (1) 弁財澗

神恵内は、積丹ブルーの海岸線が続く国道229号が絶景スポットとして名高く、美しい夕日、海産物など豊かな自然を満喫できるが、歴史文化も奥深く、様々な北前船のゆかりがのこる。国道229号沿いの弁財澗大橋はその名の通り、弁財船すなわち北前船が出入りしていた場所である。松浦武四郎「再航蝦夷日誌」には「弁才トマリ」と記載されている。

当時、積丹半島沖は難所で遭難が多発していた。神恵内墓地には弁財澗遭難者慰霊之塔・記念碑がある。明治二十四(一八九一)年、北陸と山陰から来た五隻の弁財船が弁財澗に停泊中、大時化に遭って沖に流され乗員二十一名が死亡し、同年八月四日、犠牲者を供養するために慰霊塔と記念碑が建立された。慰霊塔は弁財船の横柱(ケヤキ)で作られている。当初、弁財澗岬に建立されたが、昭和六十一(一九八六)年八月二十日、神恵内墓地に移転し、記念碑の横に設置された。現在では慰霊塔の文字はほ

ほとんど読み取れなくなっているが、記念碑には遭難者の名前と出身地が刻まれている。

遭難船名と出身地・犠牲者数

船名	出身地	現在の地名	犠牲者
喜宝丸	越中国石田村	富山県黒部市	9名
正運丸	加賀国安宅町	石川県小松市	2名
焼天丸	隠岐国美田村	島根県西ノ島町	4名
神通丸	越中国東岩瀬町	富山県富山市	3名
栄宝丸	加賀国黒崎村	石川県加賀市	3名

越中国石田村で北前船交易をはじめた船主の一人として、浜松与三左衛門が知られているが、神恵内沖での遭難者には浜松姓の船乗りが三名含まれており、関係者ではないかと思われる。石田の資料には、宮崎善四郎の持ち船に「喜宝丸」の名があり、遭難した船である可能性がある。石田では北海道への移住者が多く、北前船による北海道とのつながりの深さが伺える。



「喜宝丸」の船絵馬 奉納者は木下漁業部・木下寅吉。奉納年は不明(寸法578×785mm)



西の河原極楽まつり  
「カムイナイ」(No.13/1994年)より。



巖島神社(神恵内村大字神恵内村)

## (2) 西の河原

神祕の霊場として知られる西の河原には、難破船の犠牲者を供養するために祀られたお堂や地蔵、積み上げられた石の塔などがある。かつては船で行くことができたが、現在では毎年六月二十四日に行われる「西の河原極楽まつり」以外は立ち入ることができない秘境となっている。「時化の兆しがあると地蔵が浜を見回る」といった伝説がいくつも伝えられている。

西の河原には、石仏二体、金物一体、木仏一体、比較的新しい小さな石仏が数体ある。金仏は栖原屋角兵衛が安置したといわれる。栖原屋角兵衛の所有船が難破した際、多数の溺死者が出たため、後に金仏三体を北前船に積んで運び、神恵内の西の河原、岩内の浜中、余市に安置して犠牲者の冥福を祈ったという話が伝わっている。

### (3) 神恵内の船絵馬

前述の林昇太郎氏の論文には、神恵内の巖島神社と珊内稻荷神社の船絵馬が記載されているが、現地調査を行ったところ、残っているのは巖島神社の一面のみで

あることがわかった。珊内稻荷神社では以前廃棄されてしまったという。

巖島神社の船絵馬は「喜宝丸」を描いたもので、奉納者は「木下漁業部・木下寅吉」。奉納年は不明である。喜宝丸は木下寅吉の第二の持船で明治四十年頃に就航したと伝わる。境内の狛犬は明治四十四年に木下寅吉が奉納したもので、喜宝丸の船長が藤木次郎吉であったことなどが記載されている。

巖島神社は、慶長八(一六〇三)年に創祀され、承応元(一六五二)年、漁業や航海の安全を祈願し、国海神社、讃岐国金毘羅宮から諸神を祀ったという海のつながりの由緒を持つ。明治四年、社号を巖島神社に改称した。

### (4) 神恵内村郷土資料館の北前船関連資料

神恵内村郷土資料館(神恵内村大字神恵内村)には神恵内の歴史文化に関する資料が約四百点展示されている。北前船関連資料として新潟産の焼酎徳利(明治期)が展示され、船筆筒や尾道産の酢徳利などが保管されている。

平成二年十二月二十五日、神

恵内青少年旅行村の入口に高さ十五m、幅二十五mの北前船のイルミネーションが設置された。当時、北前船は開拓の先駆者たちの象徴で、その心意気を受け継ぎ、新たな船出のシンボルとして村を明るく照らし出すと言われていた。今後、あらためて神恵内と北前船の深いゆかりが再発見されることを期待したい。



新潟産の焼酎徳利(明治期)  
神恵内村郷土資料館

#### 【参考文献】

『北前船と小樽・後志』歴史文化のルーツを訪ねて(小樽商科大学グローバル戦略推進センター地域経済研究部、2016年)、中西聡『北前船の近代史 海の豪商たちが遺したもの(改訂増補版)』(成文堂、2017年)、牧野隆信『北前船を語る』(博文堂、2002年)、林昇太郎『積丹半島に現存する絵馬について』『北海道開拓記念館研究報告』13号(1993年)、『積丹町史』(積丹町、1980年)、神恵内村役場所蔵資料。

#### 【謝辞】

本稿執筆にあたり、積丹町教育委員会の阿部剛さん、神恵内村教育委員会の熊谷溪太さん、積丹町、神恵内村の多数の皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。